

第6回 揖斐川町学校教育の在り方審議会

＜日 時＞ 令和8年6月19日（金） 午後1時30分～
＜会 場＞ 揖斐川町庁舎（3階）防災対策室

＜次 第＞

- （1）開会挨拶
- （2）報 告
 - ・ A L Tとの意見交換会
 - ・ 行政視察の報告（「飛騨市学園構想について」）
- （3）議 事
 - ・ 議第7号 論点整理①～⑤
- （4）意見交流
- （5）その他
 - ・ 第7回審議会（第2回「学校教育の在り方シンポジウム」）
- （6）閉会挨拶



令和8年度

揖斐川町・揖斐川町教育委員会

揖斐川町学校教育の在り方審議会・第2回 教育委員会定例会

A L T（外国語指導助手）との意見交換会（議事録概要）

1 日 時 令和8年5月26日（火） ＜開会＞ 10時10分 ＜閉会＞10時50分

2 場 所 揖斐川町役場（3階）研修室

3 出席者

審議会委員 小林 直樹

A L T Cedric Osborn-Brown Alexander、Richard Palmer

教育委員 松井 乃里子、折戸 克明、八幡 雅夫

事務局 香田 静夫（教育長）、所 貴宏（事務局長）、佐竹弥生（学校教育課長）

中川 幸治（社会教育課長）、植山まりこ（学校教育課・学校教育係長）

1 日本（揖斐川町）の学校教育のよいところは何か。

（Cedric）

- ・ 先生が子供たちに対して柔軟な対応をしている。例えば、子供に何か心配なことがあれば、別室に呼んで話を聞くなどの関わりができる。
- ・ いじめ対策がよくできている。いじめは見付けにくいものなのに、どうやって見付けるか、どうやって止めさせるかなど、先生たちが真剣に考えて実行している。
- ・ 子供に任せる活動がある。例えば、掃除の時間や集団登下校など、先生の目が行き届かないところでも子供たちは自分たちでしっかりと活動できている。
- ・ どの子供にも平等にできている点もよい。給食の提供や制服の利用は経済的な困窮家庭にとってはとても助けになる。

（Richard）

- ・ 低学年と高学年の関係がよい。登下校の際、高学年の子供は低学年にとってもやさしくしてくれている。運動会などもみんなで一緒に取り組んでいることはよいことだと思う。
- ・ 放課後や夏休み等子供を預かってくれる学童保育は助かっている。ニュージーランドにはない仕組みで、両親共働きの家庭にとってはとてもありがたい。
- ・ 給食の提供だけでなく、（揖斐川町は前から給食費が無料だったが、）今年から全国の小学校では給食費の無償化が始まったことに驚いた。

（小林直樹） 日本の学校の教育活動は海外でも行われているか。

国 名	家庭訪問	運動会	遠 足	授業参観	学童保育	その他
America	今はない	ない	ある。	ある	ない	夏休みが長い 不登校は多い
New Zealand	ない	平日 保護者参観なし	年1回	ない	ない	不登校は多い

（Cedric）

- ・ 不登校はアメリカでも増えていると思う。揖斐川町では、学習室で勉強したり、別室で過ごしたりできるよう配慮されていてよい。オンライン授業や家庭訪問しているし、「ほほえみ教室」に通学することもできる。フリースクールなど、学ぶことができる環境があり安心して生活できるのではないかな。

（折戸委員） 子供たちは、“縛られる”という圧迫感から不登校になってしまうケースがある。西濃学園では、教師が子供たちに溶け込んで接している。

（Cedric）

- ・ それについては、学校では先生たちと子供たちとの関係が固いというか、近寄りづらいものになっていないか。A L Tは先生ではないので子供たちと同じような関係をつくることことができる。また、いつも明るく、フランクに接しようと心がけている。だから、子供たちとの間に壁がなく、気軽に声をかけてくれる。どんなときでも、どんなことでも話ができる関係をつくるのが大切だと思う。

（Richard）

- ・ 友達感覚で漫画の話もするし、学校に来たらリラックスできる場所だと思ってほしい。

(中川課長) アメリカやニュージーランドにも地域の公民館のように大人が学べるところがあるのか。

(Gedric)

- ・ アメリカにもあると思う。また、大学が入学しやすいのでいつでもだれでも学ぶことができる場所になっている。

(Richard)

- ・ ニュージーランドにも（公民館のように）ヨガやダンスをする教室はあるが、勉強の場は聞いたことがない。大学は全国に6校しかない。国全体の人口が愛知県と同じくらい（約540万人）なので割合は少ないと思う。

(八幡委員) 地域の人たちが学校に積極的に協力しようとしている。子供たちにはやがて地域社会で活躍してほしいと願っている。

(Gedric)

- ・ アメリカにはそうした考え方はない。むしろ敵対していたり、クレームが多かったりする。中にはモンスターペアレント（ヘリコプターペアレント）と呼ばれる人もいる。

(Richard)

- ・ 小島小学校で勤務しているが、小島地区は学校の教育活動に協力的で、世代を越えてコミュニティーがつながっているように感じられる。

(松井委員) 学校のカリキュラムはどうか。

(Gedric)

- ・ 「モンテッソリー教育」等、専門的な教育を行っている学校もある。
 - ＊ 子供には自分を育てる力がある。大人は子供が自発的に育つ環境を整え成長をサポートするという考え方による。イタリアの医師マリア・モンテッソリーの提唱

(Richard)

- ・ 日本との違いで言えば、ニュージーランドの小中学校には宿題がない。
- ・ 小学校の算数の授業内容のレベルが高いことに驚いている。

2 学校で変えたほうがよいと思うことは何か。

(Richard)

- ・ 住んでいる町には吹奏楽クラブがあって、活動が夜20時30分まで行われていると聞いた。生徒たちは、部活動のほかにも家族と過ごす時間や趣味の時間などやりたいこともあると思う。やり過ぎている部活動を変えたほうがよい。
- ・ 外国籍の子供たちは、転入と同時に通常のクラスに入って生活したり学習したりしているが、日本語も分からない中で本人たちも先生方も対応に困っている。
例えば、大垣市や関市のように、プレスクールがあって基礎的な日本語や日本の生活・文化を学んだあとで学校に通学するようにしてはどうか。揖斐川町では町も小さく、プレスクールを整えるのは難しいので、大野町、池田町と合同でつくってはどうか。

(Gedric)

- ・ 子供たちには、自分で考えて行動できるようになって（そうした力を身に付けて）ほしい。例えば、中学生たちの様子を見てみると、先生が来ないと動けない（活動できない）といったことがある。友達どうして助け合うことで行動できるようになるのではないか。これからの社会では大切なこと。学校は、もう少し自由に生徒たちに活動させてもよいと思う。

第6回 学校教育の在り方審議会

－ 議題7号「論点整理」について －

- 論点整理（1）

「必要な教育内容・教育方法」

- 論点整理（2）

「学校統合の必要性」

- 論点整理（3）

「学校統合する場合の規模と時期」

- 論点整理（4）

「学校統合する場合の設置場所」

- 論点整理（5）

「設置可能な学校の形態」

論点整理（１）必要な教育内容・教育方法

課題	◎ 少子化・学校の小規模化に伴う学びの困難さをどう克服するか。 ▽コミュニケーション能力や社会性が身に付きにくい。 ▽仲間と切磋琢磨できる環境の中で意欲や向上心、成長が引き出されにくい。 ▽多様な見方や考え方に触れることが難しく、学力向上への懸念がある。
基本的な考え方	1 確かな学力の育成 ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」のバランスを工夫 ・「非認知能力」（学びに向かう力・人間性等）の育成 ＊目標に向かって粘り強く取り組む力、他者と協力するコミュニケーション力、感情をコントロールする力 ・実生活・実社会の課題解決に学ぶ「探究的な学び」の充実 2 地域社会（ひと・もの・こと）とのつながりを大切にした教育の推進 ・異年齢・世代、異文化・言語等、様々な人たちとの交流を通して、思いやりの心や寛容な心等、豊かな心を醸成 ・地域の自然・歴史、伝統文化等に学ぶ体験的な活動を位置付けた「ふるさと学習」を通して、ふるさとへの誇りと愛着を育み、将来の生き方への理解を深める。 3 だれ一人取り残さない教育の推進 （１）特別支援教育の充実 ・児童生徒の発達特性、障がいの状況等に応じた支援と教員研修によるスキルアップ （２）不登校未然防止と児童生徒等支援の推進（Ｒ１：23人→Ｒ７：44人） ・「小１プロブレム」と「中１ギャップ」の解消 ・民間を含む関係機関との連携による居場所・学びの機会の提供 （３）学び直しの機会の確保（Ｒ２国勢調査：小学校卒 209人、中学校卒 3,214人、未就学者 20人） ・生涯にわたって学び続けることができる場の提供
住民の意見	○小規模校では、先生方が子供たち一人一人に手厚くきめ細かな指導をしていただけるので学力面での成績もよいということを聞いた。 ○「社会性」を身に付けることが学校や義務教育では必要。その意味では、少人数になってしまうというのはやはり問題があり、複数のクラスがあった方がよい。 ○一つの正解を求めるだけでなく、ものごとの根幹を自分で考える授業をすることで、子供が好奇心をもって自主的に学習に取り組めるようになる。そうした子供の好奇心や自主性を育むには、目標や将来の夢があることが必要だと思う。 ○子供たちが、例えば地元の高齢者から教えていただくことで、地域の方たちとのつながりが広がると思う。また高齢者の方たちは子供たちから元気をもらい、生きがいを感じることもできるので、そうした授業をやっていただけるとありがたい。 ○これまでの授業は、ほとんどが一斉授業だが、そのペースに合う子供と合わない子供がいるため、「個別進度学習」をもっと取り入れるとよいのではないかな。 ○異学年で授業を行うことで、最初は不具合も起きるかもしれないが、次第に教え合う姿が見られたり、温かい雰囲気や育ったりするといった効果があると聞いた。 ○コミュニティ・スクールが導入されて学校は地域社会の核としての役割を強くしているので、地域住民が積極的に教育活動等に参加し子供たちの学習を応援したい。

論点整理（２）学校統合の必要性

課題	◎ 学校統合のメリットとデメリットの優位性が判断できない。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>＜メリット＞</th><th>＜デメリット＞</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>○集団性による社会性の向上</td><td>▽教員のきめ細かな見届けや支援の不足</td></tr> <tr> <td>○複式学級の解消、学年複数学級の編制</td><td>▽通学区域の広域化に伴う負担増</td></tr> <tr> <td>○施設設備の効率的な維持管理と充実</td><td>▽地域コミュニティの核の喪失</td></tr> </tbody> </table>	＜メリット＞	＜デメリット＞	○集団性による社会性の向上	▽教員のきめ細かな見届けや支援の不足	○複式学級の解消、学年複数学級の編制	▽通学区域の広域化に伴う負担増	○施設設備の効率的な維持管理と充実	▽地域コミュニティの核の喪失
＜メリット＞	＜デメリット＞								
○集団性による社会性の向上	▽教員のきめ細かな見届けや支援の不足								
○複式学級の解消、学年複数学級の編制	▽通学区域の広域化に伴う負担増								
○施設設備の効率的な維持管理と充実	▽地域コミュニティの核の喪失								
基本的な考え方	1 学校統合に対する住民の意向（住民アンケート調査） 必要な教育環境：多くの仲間と関わりながら切磋琢磨できる環境（58.0%） 小学校1学年の適正なクラス数：2クラス以上（82.2%） 中学校1学年の適正なクラス数：2クラス以上（93.1%） 学校統合の可否：少子化や学校施設の老朽化の場合は考えた方がよい（56.5%） 2 人口推計データに基づく学校統合の合理性 ・出生数の減少が続いており、直近2年間は48人(学年2クラス規模) ・令和14年：小400人、中298人、令和17年：小296人、中242人 3 地域とともにある学校づくりの更なる推進 ・「地域学校協働本部」を設置し、学校運営協議会との連携・協力による「学校・地域一体型の教育モデル（自助・共助・公助の考え方に基づく教育活動）」を展開 4 メリットを活かしデメリットを最小化する取組み ・クラス替えが可能な学年の集団規模を確保しつつ、県費加配教員や町費支援員の配置等により個に応じたきめ細かな指導を充実 ・スクールバスを効果的に運行することで通学の安全性（防犯等）と時短を保障								
住民の意見	○私の子供は、中学校に入ってクラス替えというものを初めて経験した。1年生の時に自分がいた環境と、2年・3年生とクラス替えを繰り返して刺激になったし、伸びる部分もあって、それはそれで必要なことだということを感じている。 ○揖斐川町の小・中学校は、特別支援学級や通級指導等がとても充実している。特に少人数だからこそ、子供の特性や気になるところを見付けてもらうことができ、早い段階から必要な支援を受けることができているように思う。保護者にとって発達に不安や悩みをもつ子供を見逃さないためにも、小規模校も必要なのではないか。 ○「0歳から1歳」の子供の人数を見ていたら、学校統合しないなどと言っていられる状態ではなく、1学年2人や4人になってしまったら、授業というよりも個人教育の延長になってしまい、一緒に集団生活をするのがなくなってしまうので、この問題は早急に考えなければいけないと思う。 ○小・中学校というのは、地域にとっては防災拠点という側面もあるし、150年の歴史があるため、卒業してきた自分たちにとっては愛着のある場所。学校統合には、感情的に納得いかないという人も多いのではないか。 ○子供たちを見ていると、池田町と揖斐川町で設置している養基小学校では、卒業すると別れて各町の中学校に進学することになる。そのため、小学校の段階からそれぞれの町の学校に通う方がよいのではないかと思う。								

論点整理（3）学校統合する場合の規模と時期

課題	◎ 学校統合する場合の規模と時期をどうするか。																
	1 学校統合の規模 案①：小学校1校と中学校1校 案②：小学校2校と中学校1校 2 学校統合の時期 案①：小中学校を同時期に統合 案②：小学校を段階的に統合し最終的に小学校1校と中学校1校に統合																
基本的な考え方	○学校統合の規模と時期 ・学校規模は、住民の意向、児童生徒数及び学級数の推移を踏まえ、小学校1校と中学校1校が妥当（併設又は単独） ＜住民の意向＞ 小学校1学年の適正なクラス数：2クラス以上（住民82.2%、教員91.5%、小学生35.4%） 中学校1学年の適正なクラス数：2クラス以上（住民93.1%、教員95.3%、中学生87.3%） ＜児童生徒数・学級数の推移（推計値）＞ <table><tr><td>区分</td><td>令和11年</td><td>令和14年</td><td>令和17年</td></tr><tr><td>児童数</td><td>540人</td><td>400人</td><td>296人</td></tr><tr><td>生徒数</td><td>385人</td><td>298人</td><td>242人</td></tr><tr><td>クラス数</td><td>小：全学年が3学級以下 中：全学年が4学級</td><td>小：過半数の学年が2学級 中：全学年が3学級</td><td>小：全学年が2学級 中：2学級の学年が出現</td></tr></table> ・学校統合の時期は、上記の学校規模に見合う令和14年以降が適当 令和14年には、小学生が400人、中学生が300人をそれぞれ下回り、学年のクラス数が、小学校では過半数の学年で2学級となり、中学校では全学年で3学級となる。 ＜留意事項＞ ＊ 小学校を段階的に統合することについては、児童の心的負担が生じること、校舎改修等、財政的な負担が大きいことなどにより困難 ＊ できるだけ早い時期に町内小学校の複式学級編制を解消したいが、直近の5年間は校舎改修や施設整備が時間的に困難 ＊ 組合立養基小学校の統合が検討されることになれば、時期について池田町と合意形成が必要	区分	令和11年	令和14年	令和17年	児童数	540人	400人	296人	生徒数	385人	298人	242人	クラス数	小：全学年が3学級以下 中：全学年が4学級	小：過半数の学年が2学級 中：全学年が3学級	小：全学年が2学級 中：2学級の学年が出現
	区分	令和11年	令和14年	令和17年													
児童数	540人	400人	296人														
生徒数	385人	298人	242人														
クラス数	小：全学年が3学級以下 中：全学年が4学級	小：過半数の学年が2学級 中：全学年が3学級	小：全学年が2学級 中：2学級の学年が出現														
住民の意見	○今後の人口状態を考えると、「同級生は多い方がよい」という意見もあることから、小学校・中学校1校ずつがよいのではないかと。 ○学年複数クラスの確保が望ましい。学校統合もやむを得ないと思う。 ○新しい小中学校をつくり、学年複数クラスで社会性や協調性を学んでほしい。 ○成人して思うことは、やはり「学校は集団の中で社会性や協調性を育む場所」であるということ。ずっと一人や少人数で過ごしてきて、他者との交わり方や関係の構築ができないと、その後社会に適応することに大きな困難を抱えてしまう。 ○子供の人数が減っているので、町全体で一つあるいは二つの学校をつくるのが望ましいと思います。 ○通学手段、学校の場所等、考えることは山積みですが子供たちの幸せのために、早急に統合を検討してほしいと願います。 ○学校を統合すれば、教師の配置人数も減らすことができる。子供の数が減っているのに教員不足が止まらないなら、統合して必要な先生の数を減らすほかないと思う。																

論点整理（４）学校統合する場合の設置場所

課題

◎ 学校統合する場合の設置場所をどうするか。

1 広域な町内に在住する児童生徒の通学の安全確保と負担軽減

・町内の各地域から均一な距離・時間にある場所に設置する。

・スクールバス等の効率的な運行によって通学の安全性と時間短縮を図る。

2 学校設置に係る経費の抑制

・既存校舎の利活用によって新たな土地取得や建築資材に係る費用を削減する。

基本的な考え方

1 揖斐川町の人口重心を考慮した場所

・揖斐川町上南方 565 番地付近（東経 136 度 33 分、北緯 35 度 29 分）

➡ 最寄りの既存の学校：大和小学校、北和中学校

2 児童生徒の通学に係る負担をできるだけ軽減できる場所

北西端：坂内広瀬～北和中学校 24 km・44 分

北東端：谷汲高科～北和中学校 15 km・40 分

南西端：春日寺本～北和中学校 15 km・40 分

南東端：小柳糠吹～北和中学校 7 km・20 分

町内の各地域からの距離と時間
（＊時間は実際のバス運行時間）

➡ 北和中学校

3 既存の学校の安全性（参照「防災ハザードマップ」）

・「土砂災害特別警戒区域」「土砂災害警戒区域」「浸水区域」のいずれも指定なし

➡ 北和中学校（のみ）

4 既存の学校の利活用

校 舎	築年数	揖斐川中・北舎 15 年（H23 年）	大和小・北舎 16 年（H22 年）
	総床面積	揖斐川中 5,190 m ² （4 階建て）	揖斐小 4,104 m ² （3 階建て）
体育館	築年数	北和中 13 年（H25 年）	谷汲小 19 年（H19 年）
	床面積	北和中 3,119 m ²	揖斐川中 1,711 m ²

➡ 小中併設の場合：北和中学校（理由：体育館の共用、バスヤードの土地確保）

住民の意見

○統合するのであれば、どこかの既存の学校に集めるのではなくて、やはり新しいところに、「新しい」という感覚で建物をつくっていただき、揖斐川町の子供たちの今後の教育政策を大きく発展させてもらいたい。

○揖斐川町は広域なため適切な学校の配置を考えないと、通学方法によって子供たちが勉強する時間がなくなってしまうなど不利益が生じることもある。

○理想としてはできる限り町の真ん中の広いところで、運動場もしっかりと確保したい。場合によっては小学校と中学校を一緒の場所につくことも考えてほしい。

○確かに財政が非常に厳しいことはよく分かっているが、住民感情からすると、「おらが学校」として、自分が学んだ学校には思い入れがある。学校統合ということになるならば、ぜひとも新しい学校をつくってもらいたい。もし既存の学校を使うことになれば、住民間で軋轢が生まれるのではないかと危惧をする。

○町全体で学校を統合するのであれば、児童数が一番多いところに学校を建設するというのはどうか。土地の取得や拡張など、様々な問題もあると思うが、児童数が断然多いところに統合することが経費削減や通学に係る負担を減らすことになる。

論点整理（５）設置可能な学校の形態

学校の形態		特 徴	メリット
小中一貫教育	併設型 小中一貫教育校	・教育課程は小6年＋中3年で編成する。 ・小学校と中学校でそれぞれの校長が統括する。	○異学年交流による教育活動がしやすい。 ○教員の小中兼務ができれば教科担任制による学習ができる。
	義務教育学校	・小学校と中学校9年間の義務教育を一貫して行う。 ・一人の校長が学校全体を統括する。 ・教員の加配措置あり（副校長、教頭、教諭、養護教諭、非常勤職員等）	○9年間を通じた系統的な学習が可能で、学び直しや学習の重複を避けるなど、教育課程の柔軟な編成ができる。 ○小中教員免許取得者を配置することで、小学校段階から教科担任制による学習ができる。 ○校長が教職員と一体となって9年間の教育方針を統一できる。 ○小中間の接続がスムーズなため、中学校進学に伴う「中1ギャップ」の解消や過度な心理的負担の軽減につながる。 ○学校施設や教育資源の効率的活用
中高一貫教育	併設型 中高一貫教育校	・中学校と高校が同じ設置者（自治体、学校法人）によって運営され、教育課程、教育活動が接続されている。 ・一人の校長が学校全体を統括する。	○中学校の卒業生（内部進学者）は、原則として高校入試なしでそのまま進学できる。高校から入学する外部進学者は、通常の高校入試を経て入学することが可能。 ○義務教育としての学習内容の先取りや補完ができる。 ○異なる年齢層の生徒同士の交流を通じて、個性や創造性、社会性を育むことができる。
	連携型 中高一貫教育校	・異なる設置者の中学校と高校が教育課程の編成や教員及び生徒間の交流を通じて連携し、6年間の計画的・継続的な教育を提供する。 ・中学校と高校でそれぞれの校長が統括する。	○連携型中学校の生徒は、連携型高校だけでなく、希望に応じて他の高校への進学も可能。 ○連携型高校への進学時には、調査書や学力検査に頼らず、面接や実技等、簡便な方法で選抜することができる。
学びの多様化学校 （学びの多様化分教室）		・学習指導要領にとらわれず、児童生徒の状況に応じた柔軟な教育課程を編成することが可能。 ・対象は、年間30日以上欠席するなど不登校の傾向がある児童生徒で、断続的な不登校や特定の事情を持つ生徒も含まれる。 ・分教室として中学校内に設置することもできる。	○学習指導要領の内容を弾力的に取り扱うことができ、柔軟で無理のない教育課程で児童生徒の心身負担を軽減。 ○スクールカウンセラーの常駐など、きめ細かなサポート体制を整えることができ、個に応じた支援が可能。 ○学び直しや少人数での学習により、学力の定着が図られ、中学校卒業後の進路選択が広がる。
夜間中学 （中学校夜間学級）		・主に夕方以降の時間帯に授業が行われる。 ・週5日間の授業があり、教員免許のある教員が学習指導等を行う。給食の提供も可能 ・公立の場合、授業料は無償で、すべての課程を修了すれば中学校卒業資格を得ることができる。 ・「義務教育確保法」（28.12）第14条において、すべての地方公共団体に就学機会の提供等の措置として夜間中学の設置が義務付けられた。	○不登校等により形式的な中学校卒業生、就学年齢を超過した外国籍の方等も入学対象となり、新たな学びや学び直しの機会とすることができる。 ○教育課程を弾力的に編成することができ、無理なく自分のペースで学習をすることが可能。 ○全教育課程の終了により、高校進学が可能になるなど、卒業後の進路選択が広がる。

「学校統合の可否」(住民アンケートの結果・概要)

(1) 教育環境	一般住民	教 員	
子供たちのために必要な教育環境	①多くの仲間と関わりながら切磋琢磨できる環境 (58.0%)	①多くの仲間と関わりながら切磋琢磨できる環境 (65.1%)	
	②地域の人たちと交流の機会が多く、地域全体で育むことができる環境 (35.6%)	②一人一人に先生の目が行き届き、きめ細かな指導を受けることができる環境 (47.9%)	
子供たちに育みたい能力	①他人を思いやることができる力 (53.7%)	①社会性や協調性 (55.8%)	
	②基本的な知識や基礎学力 (53.6%)	②基本的な知識や基礎学力 (54.0%)	
(2) 学校生活	小学生	中学生	
学校生活の中で大事だと思うこと	①みんなで話し合いながら、勉強や活動ができること (59.2%)	①仲間と話し合いながら、勉強や活動ができること (67.3%)	
	②友達がたくさんできること (55.3%)	②友達がたくさんできること (46.4%)	
これからどんな学校になってほしいか	①同じ学年の仲間が多くいて、友達がたくさんできること (53.9%)	①いろいろな学校行事や部活動があること (56.9%)	
	②いろいろな学校行事やクラブ活動があること (51.8%)	②同じ学年の仲間が多くいて、友達がたくさんできること (52.9%)	
(3) 学校の規模	一般住民	上：小学校教員 下：中学校教員	上：小学生 下：中学生
1 クラスあたりの適正な児童生徒数	21～30 人 (64.7%) * 30～39 歳は「2 クラス」が他の年齢層に比べ高くなっている。	21～30 人 (53.9%) 21～30 人 (39.9%)	21～30 人 (74.6%) 21～30 人 (67.1%)
小学校 1 学年あたりの適正なクラス数	2 クラス以上 (82.2%)	2 クラス以上 (91.5%)	2 クラス以上 (35.4%)
中学校 1 学年あたりの適正なクラス数	2 クラス以上 (93.1%)	2 クラス以上 (95.3%)	2 クラス以上 (87.3%)
学校の統合について	一般住民	教職員	
	①少子化や学校施設の老朽化の場合は、考えた方がよい (56.5%)	①少子化や学校施設の老朽化の場合は、考えた方がよい (60.0%)	
	小学生	中学生	
	①「よい」と思う (25.0%) < ②「よくない」と思う (36.9%)	①「よい」と思う (32.4%) > ②「よくない」と思う (26.7%)	

- (1) 子供たちが多くの仲間と関わりながら切磋琢磨し社会性(人間関係、規範意識、協働・協力等)や協調性を身に付けたり、友達と話し合って学習したり、様々な意見をもとに探究したりすることができるよう、一定の集団規模の学校環境を整える必要がある。
- (2) そのため、小学校、中学校ともに 1 学年が 2 クラス以上で、一人一人に教師の目が行き届き、きめ細かな指導ができるよう、1 クラスが 30 人以下の児童生徒数の学校規模が望ましい。

だれもが学び続けることのできる新たな学校 <イメージ>

その他資料 ②

